その後、陸軍中央部は、進攻作戦を持久方針に転換、多田は「満州牡丹江掖河」の守備隊長になる。その時の書簡、

国境の守備に服す将士の辛労を思ヘバ東京時代とハ又別な苦しみを覚え申候〜郷土部隊の慰問も特色ある季節ニ行ハるゝことよろしかるべきと存候

といい、一方で「毎晩のごと良寛遺墨集披見致居候」と書いている。またこれらの書簡では、くりかえし御風の「渡満」を勧めている。

その後多田は、昭和十六年七月、「進級転補」して陸軍大将となって東京に帰還する。そして同年九月、「此度待命被仰付現役を去ることゝ相成候」と、太平洋戦争開戦直前現役を引退して予備役になる。

二人はその後もひんぱんに交信を続け、昭和十七年三月、多田は夫人を伴って糸魚川の御風宅を訪問して「数年来の念願」を果す。

そして、その翌年の書簡に次のように書く。

所謂東亜の共栄圏は気候すら様々なるに施設日本的に強ふるに於ハ結果や知るべきと存候

凡て相手の立場ニなりて考へずに独善的のみ陥り易きハ畢竟実力なきものゝ態度と存候

しかし、敗戦直前の昭和二十年二月十二日付書簡には「国事ハ申上ず候御推察被不度候」と書く。

敗戦後多田は「戦争犯罪容疑者」に指名され、病気で一時拘束を延期されるが再度の命令で収監される。「丁度大寒入りの日ニ大監入ニ候呵々」。

そして、昭和二十三年十二月、釈放直前に病死する。病名は胃ガンという。

翌、昭和二十四年一月二日付、睦夫人最後の御風宛書簡には次のようにある。

この二ヶ年の監禁期間中など憂鬱の日を送りましたことはなかったことニ存じますのに僅かの差にて命数つきこれを知らずに他界しましたことは実に人世の思ひにまかせぬところでございませう。

四、

御風と交流した軍人で、高田中学の同窓だったのが、建川美次・当時中将である。

建川の御風宛書簡は、昭和十二年十一月十七日付から、昭和十九年二月六日付までの六通と「名刺」である。

建川は、新潟市の生まれだが、高田中学の出身で、戦時中多くの少年を夢中にした『敵中横断三百里』のモデルだったという。御風より高田中学を二年早く卒業した先輩。互いに名前が世間に知られるようになって会ってみたい、と思うようになったのだという。

最初の書簡には、「貴君のコト〜念頭ニアリ」とある。これは、二・二六事件後の粛軍人事で予備役になった時のものである。

昭和十五年十一月九日付の封書には「就任御挨拶　特命全権大使建川美次」とある。これは、建川が駐ソ大使となり、日ソ中立条約締結の予備交渉に当った時のものである。

そして、「多年希望」していた御風と会うことが出来た。建川が御風宅を訪れたのである。その時の様子を御風は次のように書いている。

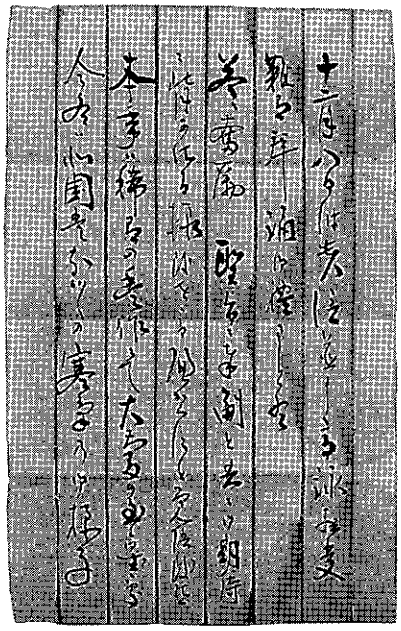
中学時代先輩であった建川美次中将に四十五年ぶりにお目にかゝった　中将はずゐぶんながい年月逢いたいとおもってゐたからといって、大変喜んでくれられた。

（「野を歩む者」・昭和十八年五月）

その後建川は、大政翼賛会総務、大日本翼賛壮年団長などを歴任し、敗戦直前の昭和十九年、国策会社「戦線鉱業会社」の社長に就任する。

この時建川は、御風に「社歌」の作詞を依頼する。御風は早速作詞して、先輩の要請に応えた。

建川は、敗戦直後の昭和二十年九月、六十五才で亡くなった。



相馬御風宛山本五十六書簡（昭和17年12月31日付け）